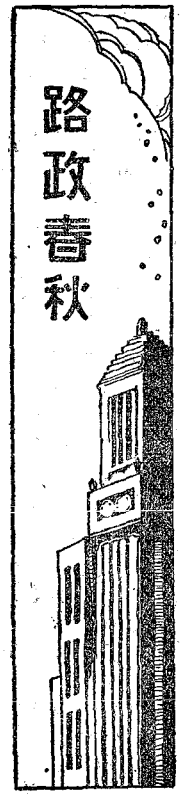

注意

本欄は讀者諸君の利用に提供す、治安と風俗とを害し又は人身攻擊に渉らざる限り奇想天外的の寄稿を望む、一文は四百字位にて取捨は編輯部に一任、原稿は道路の改良編輯部宛のこと。

珍らしい土器

約二十日間にわたつて單獨北千島踏査をなし土器の發掘、鄕土史文獻の蒐集に幾多の資料を携へてこの程歸札した北大工學部學生の宮澤弘幸君の收獲中から學界でも珍らしい土器が發見された。この土器は占守島の別飛の竪穴にて發掘されたもので内耳土器と云つて、土器の内側に耳のあるのを特徴とするが今から六、七十年前に色丹アイヌが使用してゐた皿型のものである。この時代はアイヌ人の間に鍋の使用が盛んになり不便な土器の必要があまりかへりみられなかつたので勢ひその製法も粗雜なものとなつてゐるため年代は新しいが原型をとゞめぬまでに腐蝕してゐるものが多く、それだけにその發掘には考古學の專門家でも餘程の熟練を必要とするものと云はれてゐる。宮澤君は占守島で三十餘の竪穴の内一ケ所を選定して一日がゝりで發掘、やうやくこの内耳土器を掘り當てたがこの土器はアイヌの生活の變遷を物語り、又アイヌの土器製法を窺ひ知ることの出來る唯一のものでその價値は本道考古學界で貴重なもので現在非常に少數より保存されてゐず、宮澤君の發掘によつて又一つ數を增した譯である。右土器につき北海道史蹟名勝天然記念物調査員の名取武光氏に鑑定を求めると次の如く語つた。

これは内耳土器の一種でアイヌの土器製法を物語る唯一のものでも。年代が新しいが製法が粗雜なため脆弱で發掘の際こはれやすいのです。製法は普通の粘土に砂とノツカギ草の纖維を入れて捏ね、日蔭ぼしにして水を入れて遠火で燒いて作るのですが、その時代のアイヌの土器の製法をよく物語つてをり、アイヌの製法をつたへるものはこれ一種です。とにかく宮澤君が占守まで出掛けてこの土器を發掘した熱心さは學生としては珍らしいことでせう。

海藻から燃えぬ綿

無盡藏な海藻類の科學的利用が叫ばれ、すでに海藻中に含有のアルギンサンから織物糊製紙糊（インキ止の糊）をはじめ醫藥

品や火薬原料となりマンニットなど新興工業として優秀な業績をあげてゐるが、このほど東京工業試驗所で工學博士高橋武雄技師によりアルギンサンの纖維化の研究がなされ眞綿および蒲團綿代用で捲縮性と保溫性をそなへ、しかも綿と異つて燃え難い纖維品が製出され、海藻に新利用面が開かれ、その工業化も遠くない、その製作法を簡單に紹介すると、

昆布、カジメ、ワカメ、アラメから抽出したアルギンサン曹達の水溶液を細穴から通し鹽化石灰を含んだ食鹽の水溶液に吹出させると纖維狀に凝固する。これを溫水で處理し纖維分子の配列をよくし强靱性を持たせ硫酸アンモニヤ液につけて耐水性とし、さらに鹽基性クローム明礬液につけて耐アルカリ性を與へ乾燥するとアルギンサン曹達の全量が捲縮性のある綿狀のアルギンサン纖維となるのである。

高橋技師談、スガモ、アマモなどの海藻から纖維以外のものを藥品で溶かし殘纖維を抽出する方法は現在紡績方面で木綿代用に使用されてゐるが高價について經濟的に困難を伴ふので、私の研究は海藻に含有のアルギンサンより纖維を取り、しかも海藻のアルギンサン全量を纖維化されるので大量に工業化すれば十分採算が取れると思ふ。それに原料の昆布は千島、根室、樺太にカジメは東北地方、三重縣に亙る太平洋岸に、アラメは四國、九州、朝鮮にそれ〴〵多量に產し原料は豐富だから少しも心配はない。

撫順頁岩油の增產

油母頁岩の東洋における大產地は、ほかならぬわが滿鐵の撫順炭鑛だ、あの大炭田の上層を埋めた油母頁岩の埋藏量は尨大なものであり、すでに明治四十二年頃から「燃える石」として注目されてゐたが悲しいかな、その含油率はスコットランドやエストニヤなどのそれにくらべると餘りにも低く容易に工業化を許さなかつた。

しかも歐洲大戰の經驗は、近代國防における液體燃料の重要性をば、いまさらながら痛感させずにはおかなかつた。撫順油母頁岩の利用についていよ〴〵熱心な研究が行はれたことは、けだし當然のことであつたらう。

つひに大正十四年この努力は報いられて、炭鑛員岡村、大橋、長谷川諸氏の研究が實を結び、昭和三年四月いよ〴〵工場建設に着手五年一月から作業を開始した。時に總裁は山本条太郎氏副總裁は松岡前外相であつた。

昭和八年に設備の改裝を行つたが、さらに松岡氏が總裁に就任するや、大々的な增產計畫を樹立し、昭和十一年四月から工場西部に新工場と附帶工場を建設し、十四年夏から運轉を開始した。しかし內外の情勢はそれ以上の增產を要求するので、十四年五月再び擴張計畫を樹て、從來の西工場に對していはゆる東工場を建設することとなつた。

ところが資材や資金の關係から工事の進捗はやゝ停滯氣味であつたが、政府は最近における液體燃料の需給狀況に鑑み、同工場の建設工事を急遽實現させることとなり、そのために必要な資材の配給や資金の調達について積極的に援助する旨言明した。

十ケ年苦心になる石器時代の地名表

若き考古學研究家の十年苦心の研究がこんど世に出るといふうれしいニュース――日本古代文化學會靜岡縣地方支部の一員安本博（二八）氏（靜岡市安西國民學校訓導）は十年前から靜岡縣石器時代の地名表を作成すべく苦心研究してゐたが、近く完成發表されることになつた。この種の地名表は帝大で出版してゐた日本石器時代地名表が昭和五年をもつて絶版となりそのうへ部數も極めて少く手に入れることは困難で考古學研究家の垂涎の的となつてゐたものである。然しその後考古學研究の進歩にともなつて多くの未掘遺蹟が發掘されるに至り當然この地名表も補足されなければならなかつた。安本氏の地名表は自然各府縣の研究家の間にもおよぼされることにより日本石器時代地名表に先鞭をつけたことになり考古學研究の上に重要な一頁を劃するものとして注目される。

安本氏は靜岡市安西國民學校に教鞭をとるかたはら若き考古學者として縣下に知られすでにこの方面の研究を續けること十年餘り近年時代の激しい變化にともなつて古代大和民族に關する考古資料は毎日湮滅されつゝある狀態でこれを永く保存させるためには各地で發掘された遺蹟を廣く學界にしらしめることであるがこれまで地方で數々の遺蹟を發掘しても學界へ發表することもなくよほど貴重な遺蹟でない限りたゞ地方人の研究に終つてゐた。

安本氏はこの地名表作成のため縣下各地の遺蹟を訪ねその發掘個所、石器發掘者の氏名など詳細に記入し第一部駿河國（大井川以東――富士川以西）第二部伊豆（北伊豆）の二つをすでに發表このほど第三部の大井川以西の遠州および富士南麓の地名表を終りこゝに縣下全部の地名表が完成したので近く考古學雜誌に一括して發表し靜岡縣下の石器時代の遺蹟を廣く紹介するがこれにより鄉土考古學研究家と中央との横の連絡は一層密に强化され各縣の共同的調査に大きな役割を演ずることになつた。